

人数の多い日本語会話授業での試み

ープロジェクトワークを通じてー

鴻野 豊子（釜山外国語大学校）

1. はじめに

教室内的での学習形態は、学習者の国籍、ニーズ、また日本国内か海外かによっても、その環境が異なれば形態も様々である。現在、韓国の釜山外国語大学校で担当している初級・中級の各会話クラスでは1クラスで40～50名の学習者が学んでいる。しかし会話授業であるにもかかわらず、人数の多さが原因で発話数が確保できず、講義型になってしまうことが多い。そして学習者も講義型の授業形態に慣れており会話クラスであっても受身であることが多い。学習者が受身ではなく、自ら参加でき、それにともない発話量を増やせるという環境を作るためにはどうしたらよいのであろうか。本研究では、人数が多いクラスについての現状と学習者の意識について調査を実施した。その結果「学習者の発話量が少ない」ということと「教師と学習者とのインターアクションが少ない」ということが明らかになった。そこで本研究ではグループ・ダイナミックス（集団力学・作用）¹という考え方に注目し、会話授業においてプロジェクトワークを試みたところ、学習者からはある一定の評価を得ることができた。

以下では、まず教室内的での学習者の人数に関する先行研究とプロジェクトワークに関する先行研究について概観し、本研究で行った調査の概要について述べる。そして調査の結果に基づき、実際に行った授業の実践報告を行うことにする。

2. 先行研究

学習者の人数について述べているものには森（2000）と国実（2002）がある。森（2000）では「学習者の多さ」が引き起こす問題点とその解決策について述べている。クラス編成は教育機関で決定されることが多く、状況を変えることは困難である場合が多い。そして人数が多いということは外国語学習には適さない状況であると考えられる傾向がある。しかし森はこの「学習者の多さ」を否定的に捉えない、新しい形の「授業」の実施を提案している。これは具体的にはホームステイプログラム、プロジェクトワーク、ビジターセッションなどの授業外の活動を中心に据えた授業とドラマ、プロジェクトワークなどの学習者の多さを積極的に活用した授業である。また国実（2002）では個々が持っているインフォメーション・ギャップに注目し、クラスを一人一人の持つ情報の交換の場にする

ため、授業内容に合わせ様々な形態で様々な活動を取り入れる必要性を唱えている。さらに国実（2002）は、自身が行ったアンケート結果から「学生に発表の機会を与えること」と「一人一人に対する指導の充実」が重要な課題であるとしている。本研究で実施した事前調査においても以上の点の不十分さが明確になったが、詳しくは次章で述べることにする。

プロジェクトワークに関しては、倉八（1993）、倉八（1994）、架谷他（1995）、松田（2002）などの先行研究がある。これらの研究ではプロジェクトワークが学習者の学習意欲、意識、態度に及ぼす効果について調査報告がなされている。なかでも架谷他（1995）ではグループ・ダイナミックスと学習効果との関連性について調査を行い、プロジェクトワークを通じてグループ内の相互作用の高まりが「参加」「共有化」「役割分担」という現れ方で学習効果を生んでいるとしている。これは日本国内で実施された調査によるものであるが、松田（2002）は韓国において同じような調査を行ったところ、海外においてもプロジェクトワークは肯定的に評価されるものであるということを明らかにした。

架谷他（1995）ではプロジェクトワークを実施する過程においていくつかのダイナミックス（作用）が発現すると述べられている。そこで本研究ではグループ内の作用に注目し、グループ内での情報の共有化が発話量の増加につながるのではないかと考えプロジェクトワークを試みることにした。

「人数の多さ」を肯定的に捉え、それをプロジェクトワークという形で積極的に活用した授業を実践し報告を行う。次章では人数の多いクラスの現状を知るため行った事前調査について見ていくことにする。

3. 事前調査

3-1 事前調査の目的とデータの収集方法

事前調査は釜山外国語大学校の2002年度後期「初級日本語会話」と「中級日本語会話」の授業（各1コマ50分 週3コマ 15週）の中で実施した。この調査は以下の3つの点を明らかにすることを目的とする。

- ① 教室内で学習者は実際にどのくらい日本語を使っているのだろうか
- ② 教師自身がクラスでどのように授業を進めているのだろうか
- ③ 学習者は人数が多い会話クラスについてどう考えているのだろうか

①、②についてはビデオ録画と授業記録という方法でデータを収集した。ビデオは1箇所に固定せず、他のクラスの学生に協力してもらい、教師の授業の進め方や説明の仕方、学習者への対応などの記録を行った。さらに学習者に関しても教師の話を知っている様子や活動中（ペア・ワークやグループ・ワークなど）の様子をビデオに記録した。

アンケートについては「初級日本語会話」と「中級日本語会話」の授業を履修している学習者を対象に行い、計64名の学習者から回答が得られた。質問紙は国実（2002）に倣って作成し、その内容は表1の通りである。

表1 「人数が多いクラス」についての調査項目

1. 人数が多いクラスの長所、短所を自由に書いてください。（記述式）					
2. A～Lを読んで「そう思う（＝5）」～「そう思わない（＝1）」として○を書いてください。（選択式）					
A. 一人一人の発言の機会が少ないと感じた	5	4	3	2	1
B. 一人一人の練習の機会が少ないと感じた	5	4	3	2	1
C. 自分の個性が尊重されていないと感じた	5	4	3	2	1
D. 授業に集中するのが難しかった	5	4	3	2	1
E. 他の人の話を聞くのが難しかった	5	4	3	2	1
F. 自分と他の人のレベルが違うので話しにくかった	5	4	3	2	1
G. 先生と話すチャンスが少なかった	5	4	3	2	1
H. 先生に指導してもらう機会が少なかった	5	4	3	2	1
I. いろいろな人と話をすることができた	5	4	3	2	1
J. いろいろな人と仲良くなれた	5	4	3	2	1
K. 活気があった	5	4	3	2	1
L. 雰囲気がよかった	5	4	3	2	1

このアンケートは学習者が思っていることを自由に記述できるように、質問紙は韓国語表記にし、日本語で答えても韓国語で答えてもよいという形式にした。

3-2 事前調査の結果と考察

ビデオ録画や授業記録の結果、学習者の授業態度としては、時々韓国語の使用が見られることもあるが、教師の指示通り活動を行っていることが分かった。積極的な学習者（特に教室の前半分）はペアで行う練習の間はずっと日本語を使って話しており、教師が求めている発話量は確保されていると考えられる。しかしこれはすべての学習者に当てはまるということではなく、こちらから指示しないとペアを組もうとしない学習者もいた。そのような学習者は話すのではなく、ひたすら一人で教科書に書き込んでいることが多かった。

教師自身の授業の進め方に関しては、講義中心というわけではなく、ペア・ワークやグループ・ワークなどいろいろな形態で授業を進めていることが分かった。そして学習者中心の活動以外に、教師が全体に向けて日本についての情報、特に文化や習慣などについて話しているときには、クラス形態としては講義型ではあるが、教室の後ろの方に座っている学習者までもが顔を上げて非常に興味を示しながら話を聞いていた。教師自身は講義型の授業に関しては否定的に考えていたが、授業観察から学習者たちはネイティブである日本人教師の話を聞くことには非常に興味を示すことが分かった。また韓国国内という環境で学習している学習者にとっては絶対的な日本語のインプットも少ないため、聴解力を養うという点で、教師が授業時間に話すことも彼らにとってはまた有効な学習であると考えられる。

授業観察の中で明らかになった教師自身の問題点としては、学習者の誤りに対する訂正についてで

ある。教師はクラス全体をまわってはいるが、すべての学習者に指導ができているわけではなく、教師が彼らに声をかけたり、彼らの間違いを訂正したりするのは一部の者に対してであった。このことは学習者に対して実施したアンケート調査の結果からも明らかになった。アンケート調査の結果、学習者から得られた意見で多かったものは次のようなものである。

先生と話す機会が少ない（62%）

一人一人の発言の機会が少ない（55%）

先生に指導してもらい機会が少ない（45%）

自分と他の人のレベルが違うので話しにくい（45%）

以上のほかにも、「人数が多いクラスには長所がない」「人数の多いクラスで会話授業は無理」というように人数が多いことについて否定的に捉えている者が64名中7名いた。また「人数が多いのでラク」という意見も2名から出てきた。これは「授業は教師が行うものであり学習者は聞いていればよい」という受身の姿勢を端的に表している意見である。

一方で人数が多いことに対して「たくさんの人と知り合える、いろいろな意見や情報が聞ける、他の学生から表現を学べる」など肯定的な意見も見受けられた。

以上のように人数が多いクラスでは会話クラスは無理であると考えている学習者がいること、また個々の発話量を増やしたいという教師の考えは実際に学習者も持っている意見であることが分かった。そして発話量を増やすこと以上に、教師との会話の機会を増やし、教師からの訂正を求めている学習者が半数以上いるということも明らかになった。

4. 実践報告

4-1 授業の目的

事前調査の結果を踏まえ、人数の多いクラスにおいて次の3点を考慮した授業の組み立てを考える必要性が出てきた。

- ① 学習者一人一人が参加できる
- ② 学習者の発話量を増やす
- ③ 学習者と教師とのインターアクションを増やす

まず①学習者一人一人が参加でき②発話量を増やすために、プロジェクトワークを試みることにした。これは学習者にプロジェクトというタスクを与えることによって、受身にならずに自分たちで話し合う機会を提供できるのではないかと考えたからである。さらに先行研究で挙げた架谷他（1995）でも指摘されているように、グループ・ダイナミックスが「参加」「共有化」という形で現れるということから、グループ・ワークという形態の中で情報を共有化することによって、結果としてそれが発話量の増加にもつながっていくのではないかとと思われるからである。

そして③の教師とのインターアクションを増やすために、プロジェクトワーク中に教師が積極的に話し合いに参加する時間を設けることと、教師と立場は違うが、同じネイティブと話す機会を作るという意味で日本人を教室に招くビジターセッションを取り入れることにした。以上の試みについて次

にその詳細について述べていくことにする。

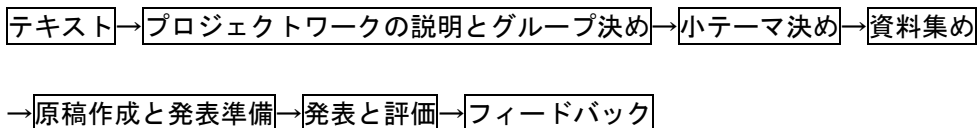
4-2 対象

プロジェクトワークは釜山外国語大学校の2002年度後期「中級日本語会話」の授業の中で実施した。この科目は日本語科3年生を対象としているものだが、他専攻の学習者も混じっている。またレベルに関しては一様ではなく、日本語能力検定試験3級から1級程度というようになり学習者によって差が見られる。学習者数は48名であり、プロジェクトワークの際には4～6名のグループに分かれて行った。なお、グループ分けは学習者が話し合いに参加しやすいように、学習者自身に決めてもらった。

4-3 プロジェクトワークの内容

テキストは「일본어회화 프리토킹 (日本語会話 フリートーキング)」(時事日本語社)を使用し、そのテキストに沿って、授業の中で3回のプロジェクトワークを行った。その流れは、図1に示した通りである。

図1 プロジェクトワークの流れ



プロジェクトワークにあてた時間数は、テーマによって異なるが1プロジェクト14～18コマである。その内訳としては「テキスト、プロジェクトワークの説明とグループ決め、小テーマ決め」に2～3コマ、「資料集め、原稿作成と発表準備」に6～8コマ、「発表と評価」に6～8コマであった。しかし授業時間内に終わらない場合は、宿題として教室外での活動となることも多かった。フィードバックは教師からの評価と学習者が他のグループの発表を聞いて感じたことを教師がプリントにまとめて各グループに配布して行った。

授業の中では人数が多いことで集中力が散漫にならないようにテキストを使用する日はペア・ワークや一人一人が歩き回って学習者同士インタビューできるような様々な形態をとった。そして学習者が中心になって行う資料集めや原稿作成、発表準備などの作業はグループでの活動となった。3回のテーマは「私たちが紹介したい映画」「韓国旅行ツアーのプランを考える」「日本人に伝えたい韓国」であり、以上の大テーマから各グループで小テーマを決めて資料を集め、原稿を作成し、発表するという流れで進めていった。

4-4 学習者と教師のインターアクション

事前調査のアンケートでは「もっと日本人の先生と話したい」「先生に間違いを訂正してほしい」という意見が非常に多く、その意見を授業に取り入れるためにプロジェクトワークの話し合いに教師も参加するという形態をとった。

これは「日本人に伝えたい韓国」というテーマで学習者たちが小テーマを決める際、各グループに10分ずつ教師が入って一緒に話し合うというものであるが、全部で10グループあったため、10分という短い時間でしかも1日だけの試行となった。

そして日本人を教室に招き、意見を交換するというビジターセッションも1日行った。これも「日

本人に伝えたい韓国」というテーマを扱ったときに行ったもので、自分たちが決めた小テーマに沿って、日本人の意見を聞き、それをプロジェクトの資料とした。参加した日本人は、韓国釜山在住の日本人5名（50代1名、30代1名、20代3名、すべて女性）である。日本人ビジターにはグループに20分入ってもらい、学習者たちは各グループ2名の日本人の意見を聞き、それを参考資料とした。

以上の要領で行った授業が学習者にどのように評価されたのか次章で見ていく。

5. 事後調査

5-1 事後調査の概要

学期の最後に「中級日本語会話」の授業を受けた48名の学習者に対してアンケート調査を実施した。質問の内容は次の2点である。

- ①プロジェクトワークについて思ったことを自由に書いてください。
- ②授業の中で、先生が10分ずつ各グループの話し合いに参加しましたが、それについてどう思いましたか。

いずれも自由記述式で書いてもらい、学習者から得られた回答はK J法を用いて分析を行った。その分析結果と考察について次に述べる。

5-2 プロジェクトワークについての評価

アンケート調査の結果は、学習者から出た意見をグルーピングしていき、そのグループを小項目グループ、中項目グループ、大項目グループにまとめ、その各グループに名前を付けていくというK J法の方式をとった。表2は上から大項目、中項目、小項目それぞれのグループに付けた名前をまとめたものである。

表2 プロジェクトワークについての学習者からの回答

プロジェクトワークを行って起こった変化												
授業について							プロジェクトを行って起こった変化					
良かった点				困難点			プロジェクトを通じて得た知識		自己の成長	グループ内作用		
① 今までの会話授業との比較	② 教材について	③ クラスの雰囲気	④ 話すチャンスの増加	⑤ 最初は大変だったがよい経験に	⑥ マイナス面	⑦ レベル差	⑧ 日本語力（四技能）	⑨ 日本語以外の知識	⑩ 自己の変化	⑪ 友人作り	⑫ 他の学習者からの影響	⑬ 協同

この調査で一番多かった意見は表2の小項目にある⑪「友人作り」に関する意見であった。具体的には「友達と親しくなれた」「他の学科の人と知り合えるきっかけになった」などの意見である。

このような意見は「グループ内作用」の項目の⑫「他の学習者からの影響」や⑬「協同」とも関連してくる。学習者からの意見は「友達と一緒になので負担感がなかった」「自分に不足する部分を他の人たちで埋め合わせることができる」「分からなかったところが話し合って分かるようになり、こうして分かるようになったことは忘れられないと思う」というものである。これらはグループ・ダイナミックスが効果的に働いていたため得られた回答であると考えられる。また⑩「自己の変化」の項目では「先生から教えてもらうものだけ学ぶのではなく、学生たち自らが探して勉強できた」という意見もあった。このことから授業に受身ではなく積極的に参加していた様子が伺える。

その他に多かった回答としては⑤「最初は大変だったがよい経験に」という項目である。これまで学習者中心という授業形態に慣れていない学習者にとって今回の授業は戸惑いも多かったようである。「最初は面倒くさいと思ったがけっこう面白かった」「授業の中で一番難しくて大変だったが一番やりがいがあった」「プロジェクトワークは初めてだったのでちょっと戸惑ったがよい経験になった」等の回答から学習者の最初の戸惑いが見える。

そして⑥「マイナス面」の項目には「大変だったので学期に2回ぐらいがよかった」という意見があった。さらに⑦では「下手な人は話す機会を逃しやすい」という指摘もあった。今回の試みではグループ分けを学習者に任せて行ったが、今後は学習者の日本語能力等を考慮したグループ分けも考えていかなければならないであろう。

5-3 学習者と教師のインターアクションについての評価

グループの話し合いに教師が参加するという試みについてのアンケート結果について以下にまとめるが、ここでもKJ法によって分析を行った。

表3 教師が話し合いに入るとい試みについての学習者からの回答

次につながる試み						
今後の授業への希望			教師とのインターアクションの効果		教師と学習者	
① クラスの 評価	② 実施時間と 時期	③ 問題点	④ いろいろな ことが直接 聞ける	⑤ 日本人と 話すチャン スの獲得	⑥ 教師に対 して感じた こと	⑦ 学習者自 身について

この試みについてはほとんど否定的な意見は見られなかった。①「クラスの評価」では「本当によかった、これからもそうしてほしい」という意見が非常に多く、②「実施時間と時期」では「もっと早く先生が参加したらよかった」「時間が短かったのが残念」という意見が多く見られた。

学習者からは肯定的な意見がほとんどであったが、③「問題点」では「人が多くて話せる機会が少なかった」「グループの中でもレベル差があった」という回答が得られた。確かに教師1人に対し学習者4～6名であるので、よく話せる者の発話量が多くなるが、教師という立場で話し合いに参加して

いるため、話していない学習者にも発話のチャンスを与えたり発話を促したりすることができる。従って学習者からの指摘も考慮に入れ、今後もこのような試行を続け改善していけば十分可能性の広がる試みであったと考えられる。

5-4 結果と考察

まず学習者の授業への参加度について述べる。事前調査のアンケートでは「人数が多いとラク」と書いていた学習者もいたが、今回の授業ではプロジェクトというタスクが与えられていたため授業に全く参加しないという学習者はいなかった。むしろ全員の前で発表しなくてはならないので、グループ内では協力し合い、積極的に参加する姿が多く見受けられた。そしてこのような学習者間の相互作用はグループ内にとどまらず、他グループとの間においても見られた。発表の際に質疑応答を行うなど、他グループとのやり取りもあったため、グループ内の相互作用のみならずグループとそれを取り巻く他の学習者との相互作用も促されたのである。これはグループ・ダイナミックスがうまく作用した結果であろう。

学期中は授業すべてをプロジェクトワークに当てていたわけではない。しかしテキストを使用しての講義型の授業やペア・ワークのときにも、学習者からの発言は多く、授業への参加度は高かったようである。これはプロジェクトを通してクラス全体の前で発表する機会が何度かあり、いろいろな人の前で話すことに躊躇しなくなっていたためだと思われる。

次に学習者の発話量について述べたい。最終発表のために話し合い、協力する中で学習者たちはかなりの発話をしていることが授業観察から分かったが、日本語能力の高い学習者が中心になっている場合が多かった。また韓国という環境にあって、学習者の共通言語である韓国語が聞かれることもしばしばあり、このことは今後対応していかななくてはならない問題点である。

最後に学習者と教師とのインターアクションに関して述べる。教師がグループ・ワークに参加し学習者と意見を交換するという試みは学習者には評価されるものであった。事後調査の回答にもあったが、時間が短すぎたので、今後はこのような機会を増やし、それが学習者の会話力や聴解力等にどう影響するのかも見ていきたい。

6. おわりに

会話授業といっても、人数が多く講義や受身の授業に慣れている学習者たちに発話の機会を授業内で与えることは困難である。しかし学習者一人一人は「話したい、話せるようになりたい」という意志は持っており、タスクを与えられればそれを達成するために積極的に活動を行うことができる。この点でプロジェクトワークは有効であったと思われる。グループ・ワークの際には、グループ内にレベル差が生じ、日本語能力の高い者が低い者を助け協力し合う場面が多く見られたが、やはりレベル差に関しては今後考えていかなければならない問題点である。

また今回は韓国の大学という韓国人のみの教室での試みであったため、プロジェクトの作業中には韓国語を多用している学習者が見受けられた。日本語を使う必要のない環境で、どれだけ母語ではなく「日本語」を使うクラス作りができるかも今後の課題である。

参考文献

- ①カートライト, ザンダー (1969) 『グループ・ダイナミックス』三隅二不二, 佐々木薫訳編 誠信書房
- ②架谷真知子, 二村直美, 津田彰子, 三好和枝 (1995) 「上級学習者のプロジェクトワークーグループ・ダイナミックスに関する実験的考察ー」『日本語教育』87号
- ③川喜多次郎 (1986) 『K J 法』中央公論社
- ④木村宗男 (1988) 『教師用日本語教育ハンドブック 7 教授法入門』国際交流基金 p 141
- ⑤国実久美子 (2002) 「人数が多いクラスにおける問題点とその取り組み」釜山日本語教師会2001年度活動報告
- ⑥倉八順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果ー一般化のための探索的調査ー」『日本語教育』80号
- ⑦倉八順子 (1994) 「プロジェクトワークが学習者の学習成果に及ぼす効果と適性との関連」『日本語教育』83号
- ⑧縫部義憲 (1991) 『日本語教育入門』創拓社 p 270
- ⑨バルタン田中幸子, 猪先保子, 工藤節子 (1998) 『コミュニケーション重視の学習活動 1 プロジェクトワーク』凡人社
- ⑩松田勇一 (2002) 「海外でのプロジェクトワークが学習意欲に及ぼす効果」韓国日本語学会第6回学術発表会論文集
- ⑪森恵理香 (2000) 「学習者の多さ」にどう対処するーRajabhat Institute ChaingMaiの事例と北部タイ日本語教師会での話し合いからの考察ー北部タイ日本語教師の会・活動報告例

注

- ¹ 「グループ・ダイナミックス」はカートライト, ザンダー (1969) によると「集団の本性およびその機能を支配する諸力に対するより深い理解の獲得を目指す研究分野」と定義されている。

